



## 努力の壺

校長 伊藤 栄司

6月中旬より、水泳の学習が始まり6階のプールには子どもたちの歓声が響いています。水泳は、自分で目標を立て達成するために努力する学びに向いています。学びは「水慣れ」から始まりますが、目標が段階的に難しくなっていくので、一つ一つ達成しながら階段を上っていくように上手になる特徴があります。

一方で、苦手意識があったり、上達を感じられなくなったりするとやめたくてしまう気持ちになることもあります。記録が伸びない、平泳ぎの足がうまくできない等、今まで順調に上ってきた階級の次の一段がとて高く感じてしまうような時です。そんな時、思い出してほしいのが「努力の壺」です。

### 新しい技術の習得

水泳だけでなく何か新しいことに挑戦するとき、心の中には「努力の壺」が生まれると言われます。「努力の壺」に努力の水が少しずつたまっていき、あふれた瞬間に“できるようになる”イメージです。目には見えませんが、子どもたちの学びを表す比喻として使うことがあります。

まず、「努力の壺」の大きさは子どもによって異なります。すぐに新しい技能を習得する子どももいれば、時間をかけてじっくり取り組む子どももいます。なかなか成果が見えないとき、つい焦りを感じるがありますが、成果は出なくても壺の中では努力の水が確実にたまっていきます。できなくても「今はためている時期」と捉えることで、モチベーションを高めていきます。努力を続けていると、突然水があふれる瞬間が訪れます。

### 小さな積み重ね

次に、努力の水は入れ続けなければ乾いてしまいます。中には、少しできるようになったと感じると、安心して努力を止めてしまう子どもがいます。しかし、継続することで力は確かなものになるので、小さな積み重ねが必ずや大きな成長につながります。

また、一度あふれた水はゼロには戻りません。自転車の運転や九九が良い例です。一度身に付けたものは、多少時間が空いても簡単に思い出したり、できるようになります。子どもの学びには「確かに蓄積していく力」があるのです。

最後に、子どもの壺は大人に比べてずっと小さく、努力すればするほど上達が早い特徴があります。大人になってから新しいことに挑戦するより、子どもの時期の方が吸収が速いと言われるのはこのためです。

### 1学期をふり返って

現在、子どもたちは1学期のまとめの時期を迎えています。4月からの頑張りで、国語の壺、算数の壺など、一人一人がたくさん壺をつくり抱えています。担任は、一つ一つの壺に水がどれくらい入っているのか確認しながら声をかけています。学期末には、「わかった」「できた」の声があふれ、成長を実感することができるよう指導していきます。